



江戸絵画の世界
陸の生き物

フランス・ドゥ・ヴァール著『動物の賢さがわかるほど人間は賢いのか』「プロローグ」より

20世紀のほぼ全般にわたって、科学は動物の知能について、過度に慎重で懐疑的だった。動物に意図や情動があると考えるなど、幼稚で「通俗的な」愚行と見なされた。私たち科学者はそこまで無知ではない!というわけだった。「うちの犬はやきもち焼きなんです」とか「私の猫は自分がどうしたいのかがわかっています」といった類の主張は、研究者たちはいっさい受け容れなかった。ましてや、動物が過去を振り返るとか、互いの痛みを感じるといった、さらに高度な能力など論外だった。動物行動の研究者は、認知を気にかけないか、その概念全体を積極的に否定するかのいずれかだった。ほとんどの研究者はこのテーマに遠回しに触れることすら望まなかったのだ。幸いにも例外はあった(それについては、これから思う存分説明するつもりだ。自分の専門分野の歴史が大好きなので)が、この分野の二つの主要な学派は動物を、刺激に反応して報酬を得たり罰を逃れたりすることに精を出す機械、あるいは有益な本能を遺伝によって授けられたロボットだと考えた。両派は相争い、相手を狭量と考えていたものの、根本的にはともに機械論の立場をとった。つまり動物の内面世界について気を配る必要はなく、内面世界を気にする人は誰であれ擬人観(人間以外の生物、無生物、事象などに人間の形態や性質を見出す立場。擬人主義)に傾いているか、空想的か、あるいは非科学的と考えていた。

私たちにはこの暗い時代を経る必要があったのだろうか? それ以前は、はるかに自由に考えることができた。チャールズ・ダーウィンは人間と動物の情動について幅広く書いているし、19世紀の科学者には熱心に動物に高度な知能を見つけようとする人が大勢いた。こうした試みが一時的に停止に追い込まれたのはなぜか? そして、私たちは自ら進んで生物学の首に石臼をくりつけた(偉大な進化論者エルンスト・マイヤーは、動物は言葉を持たない自動機械だとするデカルト学派の見解についてそう述べた)のはなぜか(「首に石臼をくりつける」というのはもともと新約聖書の「マタイ伝」などに出てくる表現で、重荷を負わせることを意味する)? その答えは今なお謎のままだ。だが時代は変わりつつある。ここ数十年というもの、新たな知見がなだれのように押し寄せ、近年はインターネット上で急速に普及していることには誰もが気づいているに違いない。毎週のように動物の高度な認知に関する新発見があり、その多くが説得力のある動画に裏づけられている。ラットが自分の決断を悔やみ、カラスが道具を作り、タコが

人間の顔を見分けること、さらに、特別なニューロンのおかげでサルたちは互いの失敗から学び合えることを私たちは耳にする。動物の文化、共感、友情について私たちは堂々と口にする。もはや踏み込んではいならないことは何もない。かつては人間ならではの特性だと考えられた合理性さえも、話題にすることが禁じられていない。

どの場合にも、私たちは人間を基準として動物の知能と人間の知能を比較対照したが。とはいえ、それは時代遅れの評価方法であることを肝に銘じておくといい。比較すべきは人間と動物ではなく、動物の一つの種(私たち)とそれ以外の非常に多くの種だ。便宜上、このあとほとんどの場合、「動物」という言葉で後者を指すつもりだが、人間も動物であることは否定のしようがない。したがって私たちは、知能の二つの別々のカテゴリーを比べているのではなく、単一のカテゴリー内の違いを考察しているのだ。人間の認知は動物の認知の一種であると私は見ている。それぞれに神経が通っていて独立した動きをする八本の腕の一本一本に行き渡ったタコの認知機能や、自分の発する甲高い鳴き声の反響を感じ取り、動き回る獲物を捕まえることを可能にするコウモリの認知能力と比べると、私たち人間の認知だけが特別だなどとはたして言えるだろうか?

フランス・ドゥ・ヴァール著 『動物の賢さがわかるほど人間は賢いのか』 松沢哲郎監訳 柴田裕之訳
紀伊國屋書店 2017年



曾我蕭白《牛と牧童の図》(部分) ロサンゼルス・カウンティ美術館